

コメント1

モニュメント研究の新地平

杉 本 淑 彦

専門分野を異にする研究者が一〇人近くも報告する大規模研究集会において、なにか共通テーマを設定するというのは、たいへん難しい仕事だ。専門の枠を越えて多数の研究者が関心を寄せているテーマでなければならぬ。当然のことだが、そういうものはけっして多くない。こうした難しさがあるなかで、「モニュメント」というのは、適切な選択だったと思う。実際、個々の報告は、それぞれ深い専門性を有するだけでなく、共通テーマに則した普遍性も備えていた。

こうした研究集会に出席して得られる収穫の一つは、専門的知見というよりは、むしろ、異分野の報告から受ける予想外の刺激だろう。今回もそれがあつた。まずそのことについてコメントしたい。

何がモニュメントか

西洋近現代史の研究をしてきた私には、その分野からの竹中報告と中村報告に、それほど新味は感じられなかった。べつに批判しているわけではない。むしろ逆で、両報告ともたいへんオーソドックスだったと言いたいのである。今後もしこのようなテーマで

西洋史研究をおこなおうとする場合、お手本になるような報告だった。

そもそも、日本の西洋史学界におけるモニュメント研究の積み重ねは厚い。古くは『記憶のかたち コメモレイションの文化史』（柏書房、一九九九年）所収の光永雅明「銅像の貧困 一九二〇世紀転換期ロンドンにおける偉人銅像の設立と受容」が、そして最新のものとしては長井伸仁『歴史がつくった偉人たち 近代フランスとパンテオン』（山川出版社、二〇〇七年）がある。また、翻訳書も少なくない。ピエール・ノラ編『記憶の場』（岩波書店、全三巻、二〇〇二―〇三年）や、A・J・クリストファー『景観の大英帝国 絶頂期の帝国システム』（三嶺書房、一九九五年）などがある。地理学者によるものも一点挙げておこう。ケネス・E・フット『記念碑の語るアメリカ 暴力と追悼の風景』（名古屋大学出版会、二〇〇二年）だ。それこそ枚挙に暇がない。

日本の西洋史学におけるこれまでのモニュメント研究の主流は、像ないし建物を取りあげ、死者や英雄、あるいは事件の、顕彰とか追悼といったあり方を、政治なり社会意識なりと絡ませて論じるものだった。竹中報告も中村報告も、このような研究潮流のど真ん中に位置する。

河野報告で取りあげられた古墳も、堀報告が対象とする平安時代の寺院も、井谷報告が紹介した西アジアにおける宮殿等の碑文も、滝波報告の反モニュメント運動も、そして浜井報告が論じた戦後日本の慰霊碑も、それぞれ、モニュメントと言われて私が想起するモノの範疇に入っていた。そういう意味でこれらの報告も、

西洋史学分野からの二報告と同様に、研究対象に関しては私にとって想定内のことだった。

予想外だったのは、松井報告が取りあげた西周時代の青銅器である。報告を聞いた最初の印象は、なぜこれがモニュメントなんだろう、といういささか素朴なものだった。研究会当日の口頭コメントで、何をモニュメントと考え報告者を取捨したのか、という趣旨の質問を主催者側におこなったところ、「幅広くとらえた」という説明があった。その場ではかならずしも納得したわけではなく、私自身の宿題として持ち帰ることにした。宿題をし終えて得た結論は、どうも私の頭が固かったということである。

モニュメントといえば、それは公共空間に建つなんらかの像や各種の建物を指す、というのが西洋史学界における共通理解だったと思う。実際、竹中報告と中村報告もそうだが、優れた研究は、もっぱらそのようなものをめぐっておこなわれてきた。だが、こういう研究傾向のなかに日頃から身を置いていると、考え方が固定的になリかねないのだろう。すくなくとも私はそうだった。

モニュメントの定義をもう一度自覚しておくことが必要だろうと考え、語源を少し調べてみた。Monument自体は二三世紀の中世英語が初出で、当然のことにラテン語が起源だそう。本義は「思い出させるモノ」である。だとすれば、モノ一般なわけではなく、像や建造物でなければならぬというわけではなかったのだ。

本義を確認した後、それこそ思い出した研究書があった。『記憶の場』である。記憶を創造したり想起させたりする、さまざまな媒介物が議論の俎上に載せられている。収載論文の多くが、像

や建造物に言及していることは確かだ。原書フランス語版の一部分でしかない日本語版『記憶の場』だけでも、像あるいは建造物をもっぱら取りあつかった論文の数は、「プロテスタント 荒野の博物館」「パンテオン」「エッフェル塔」「一九三一年の国際植民地博覧会」「パリの彫像」「カテドラル」の六編にのぼる。いや、言い方を変えたほうが良いのだろう。原書よりも日本語版のほうが、像と建造物を取りあつかった論文の占める割合が多い。日本における西洋史学研究の傾向が、この選択のありように反映されているのだろう。

ともあれ、原書『記憶の場』をあらためて読みなおした。日本語版もそうなのだが、像と建造物ではないモニュメントがいくつか論じられている。フランス国旗である三色旗は当然のことに、ライン河やアルプス山脈、そして海岸と森、さらに葡萄畑や小麦畑もモニュメントであることを、あらためて認識した。さらに言えば、天然記念物 (natural monument) もモニュメントの範疇に入るのだろう。

青銅器をモニュメントとして論じた松井報告は、モニュメントの多様さと、モニュメント研究が持つ地平の広大さを、あらためて私に教えてくれた。私自身が取りくむかどうかはともかくとしても、自然景観や天然記念物も視野に入れたモニュメント研究の新展開を期待したい。モニュメントとしての富士山研究や植樹研究などが想定されるだろう。実際、端緒はすでに切られていると思う。前者については、横山俊夫編『視角の一九世紀 人間・技術・文明』（思文閣出版、一九九二年）所収の丸山宏「富士の近代」がある。日本のサクラについては、高木博志「桜とナシヨナ

リズム 日清戦争以後のソメイヨシノの植樹」(西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房、一九九九年)と大貫恵美子『ねじ曲げられた桜 美意識と軍国主義』(岩波書店、二〇〇三年)があり、この両研究を踏まえたうえで、大韓民国におけるムクゲなど、国花、国樹、国鳥とされるものをそれぞれモニュメントとしてとらえ直す研究視角が重要だろう。

何が課題か

研究集会は、新たな発見にくわえて、課題の再認識という場になることもある。今回もそうだった。モニュメントがどのように民衆に受容されてきたのか、という課題である。

もともと民衆意識を検討対象にしないことが前提になっていた河野報告と浜井報告をのぞき、他の報告はいずれも、程度の差こそあれ、民衆レベルでの受容の問題を頭の片隅に置いていたように、私には思われた。そもそも、民衆意識を検証する必要性は、多くの研究者の感じているところだろう。『記憶の場』所収の論文の一つに、フィリップ・ジュタール「プロテスタント 荒野の博物館」があつて、その邦訳者である和田光司氏は、訳者解題のなかで、適切にもこんなふうに述べている。「記念集会や博物館の設立については、主催者側の意図の叙述に偏り、一般参加者側の叙述が乏しいのが惜しまれる。そのためか、著者の主張するプロテスタント内部における伝承的記憶と歴史の一体化は、やや予定調和的にすぎる印象を受ける。民衆側の反応やその記憶の世界の変容、また逆に記憶の重心の変化を巡る知識人側のせめぎ合いなどが描かれていれば、さらに生き生きとしたものになったであ

ろう」(邦訳第一巻、二四六頁)。

難しい課題であることを重々承知したうえで、例会当日の口頭コメントの際、あえて竹中氏に尋ねてみた。ナポレオン騎馬像を民衆がどのように受容したのか、それをかいま見させてくれるようなものはあるのかと質問したのである。

氏も苦慮されている、というのが返答を聞いて受けた印象だった。このことについて、会場におられた服部春彦先生からも、同じ印象を受けたという発言と、そもそも資料状況から判断して、モニュメントを建造した側の意図を検証するのは可能だろうが、民衆の受容のあり方を解明するのはきわめて困難なのではないかという指摘があつた。

指摘は、その通りだと思う。すくなくとも、一九世紀中頃までのフランス史に係わる資料状況を考えればそうだろう。フランス近代史の資料状況に通曉しておられると同時に、あくまで資料に基づく厳密な研究をしてこられた服部先生ならではの指摘だとも感じた。したがって、一九世紀前半を中心にしてナポレオン騎馬像を取りあつた竹中氏が苦慮されているのは、資料に誠実であらうとする研究者なら当然のことなのだろう。

だが、資料状況が変化する一九世紀半ば以降を研究対象にする場合は、話は別だと思う。民衆意識を間接的に反映させていると考えてもよいような資料が、この頃にはさまざま登場する。竹中氏自身が簡略ながらも言及された絵葉書やガイドブックは、その一例であるだけでなく、まだそれほど検討されていない類のものでもある。

従来の研究において、絵葉書やガイドブックよりも重視されて

きたのが大衆新聞である。一九世紀後半の欧米では、動力印刷機による大量・高速印刷が可能になったおかげで、大衆向けの安価な新聞が普及し始めた。代表的なものは、一八四二年に創刊された絵入り新聞『ザ・イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』(The Illustrated London News)と、フランスの『ル・プチ・ジュルナル Le Petit Journal』(一八六三年創刊)である。地方新聞や各種団体発行の新聞・機関誌類も、やはりこの頃になると種類も部数も飛躍的に増えた。

一九世紀後半のこのような新聞状況の行くつく先が、一八九八年のニューヨークを舞台にして二つの大衆新聞が繰りひろげた有名な部数競争だろう。その年の一月、キューバでスペインからの独立運動が活発化すると、アメリカ政府は在留アメリカ人の保護を名目に戦艦メイン号を派遣したが、ハバナ港内で爆発し沈没してしまう。いわゆるメイン号事件である。爆発原因は今日でも不明だが、アメリカ国内ではスペイン側の仕業だとみなす世論が盛りあがった。海外植民地の建設を求めるアメリカ国内の経済界・海軍などの声が、この世論を援軍にして勢いを増し、四月、アメリカはスペインに宣戦。こうして米西戦争が始まった。

アメリカの世論を戦争へと導くのに与ったと考えられているのは、部数競争を繰りひろげていた大衆新聞だった。とりわけ、『新聞王』と渾名されるウィリアム・ランドルフ・ハースト社主の『ニューヨーク・モーニング・ジャーナル』紙と、ジョーゼフ・ピューリツァー社主の『ニューヨーク・ワールド』紙は、部数増の絶好の機会としてメイン号事件を利用した。両紙は、独立運動に対するスペイン側の非人道的行為を非難することで大衆の

素朴な正義感を刺激し、さらに、メイン号事件をスペイン側の陰謀だと断定することで報復感情を煽りたてたのだった。大衆もまた、このような記事を歓迎し、両紙ともに米西戦争中に部数を急増させた。

米西戦争と世論との関係を論じる研究に典型的に見られるように、大衆新聞を資料として用いて民衆意識を分析しようとする研究は少なくない。モニュメント研究についても、大衆新聞にくわえて機関誌類も資料に使ったものが、当然ながら存在している。『記憶の場』所収のジューン・ハーグロヴ「パリの影像」がその一つだが、じつは、これよりもはるかに民衆意識に接近した論考が『記憶の場』にはある。邦訳されなかったアントワヌ・プロ「戦没者追悼碑」である。第一次世界大戦における戦没フランス兵の追悼モニュメントが取りあげられている。

プロのこの論考は、『記憶の場』所収論文のなかで十指に入る優れたものだと思っている。何が優れているかというと、モニュメントの表象分析や設置者の意図の分析にとどまらず、多数の地方新聞や団体機関誌類を使って受容者の意識に切り込もうとしている点である。誤解のないように言うと、戦没兵追悼モニュメントの設置主体は国ではなく、小さきまざまなコミュニティ(市区町村)の議会だったわけで、コミュニティの規模が小さくなればなるほど、設置者と民衆との距離は狭まると考えてよいだろう。だが、プロが問題にしたのは、このような距離感ではなく、追悼モニュメントの前で何がおこなわれたのかという、いわば設置後の状況だった。

両世界大戦間期にかぎった議論だが、プロは、設置主体の市区

町村議会ではなく在郷軍人団体が追悼モニュメント前での第一次世界大戦休戦記念式典（一月一日）を主催したことを、まず強調する。さらに、神父に先導された民衆が教会から出発して追悼モニュメントに向かう場合が多かったことに言及しつつも、式典自体は脱キリスト教的要素が色濃く混じっていたことを指摘する。一分間の、祈祷ではなく黙祷がおこなわれたことなどである。そして結論としては、追悼モニュメントは民衆にとって「共和主義的信仰、いいかえれば市民宗教の本尊」となった、というものであった。

プロの結論がどれほど妥当なのか、議論は当然あつてしかるべきだろう。しかし、民衆意識を視野に入れたモニュメント研究の可能性が一九世紀後半以降のものなら十分にあることを証した、という点では、このプロ論文を高く評価すべきだと私は考えている。

トランスディシプリナなモニュメント研究

ここ一〇年ほど、日本においても、日本史学分野や東洋史学分野で、モニュメント研究が一種のブームのようになってきているようだ。とりわけ二〇世紀以降の、軍事英雄顕彰像や戦没者追悼モニュメント、軍人墓地、あるいは戦争関連記念館・博物館に関する研究が多い。もちろん、靖国神社研究もこれに含まれる。

だが、あえて西洋近代史研究者の立場から苦言を呈すると、プロが切り拓いたような、民衆意識を十分に視野に入れている研究は少ないのではないだろうか。たしかに、モニュメントが建造された経緯については、公文書などを使って綿密に解明されてい

る。外観や展示内容の分析もおこなわれている。戦争関連モニュメントがどこに実在していたか等のデータ蒐集も進んでいる。しかし、建造後にそれらがどのように民衆に受容されたのかという問題になると、とたんに寡黙になる。データを蒐集しただけで終わっているような「研究」も多い。いったいどうしたことなのだろうか。服部春彦先生が一九世紀前半以前におけるフランス史の資料状況について指摘されたのと同じことが、日本史学分野や東洋史学分野では二〇世紀に入ってもみられるということなのだろうか。

ただその一方で、西洋近代史分野ではみられない新しい動向が、両分野では萌芽しているようだ。民衆意識を視野に入れた数少ない研究はそれぞれ、文書資料だけに頼る、ということがないのだ。簡単に言えば、聞き取りを中心にしたフィールドワークにも依拠する研究である。一書になったものとしては、英霊祭祀と民間信仰との密接な関連に迫った田中丸勝彦『さまよえる英霊たち 国のみたま、家のはとけ』（柏書房、二〇〇二年）がある。坂部晶子の博士學位論文『満洲』経験の社会学 植民地の記憶のかたち（二〇〇七年）や、短編だが上杉和央『那覇から摩文仁へ 復帰前沖縄における「慰霊空間の中心」』（二十世紀研究）（第七号、二〇〇六年）も、特筆すべき仕事だと思う。とくに上杉が展開している、追悼モニュメントの観光資源化という議論は興味深い。

この三名はそれぞれ、民俗学者であり、社会学者、地理学者である。伝統的な歴史学の方法論は綿密な文献読解にあつたわけだが、田中丸らの研究が示しているように、モニュメント研究は、

文献読解にとどまらず、民俗学・社会学・地理学が培ってきたフィールドワークを取り入れることを必要としているのだろう。そういう意味でモニュメント研究は、すくなくとも二〇世紀後半以降を対象とするなら、すぐれてトランスディシプリナ研究であるべきなのだろう。

「無関心」への関心

最新の日本史学分野や中国史学分野でみられる優れた研究についても、西洋史研究の蓄積を踏まえると、あらためて課題を指摘できる。「ないものねだり」という気もあるが、あえて言うところ、モニュメントに無関心な、あるいは無関心になっていく民衆意識にも目を向ける必要があるのではないだろうか。西洋史学のモニュメント研究者がほとんど一致して指摘することだが、モニュメントには建造ブームというものがあって、ブームが去ると関心が急激に失われた。前掲の光永論文は、こういった関心の薄さ、言い換えればモニュメント設置者の意図が達成されなかったことについても言及した好論だったと思う。『記憶の場』所収のハーグロヴ「パリの彫像」（「パリの記念像」と訳した方が正確である）は、一九世紀を通じてパリ市民をとらえた記念像ブームが、二〇世紀に入り急速に減退したことを指摘している。減退因についてハーグロヴは、「成功したのでお役御免になった」とか、せいぜい、英雄は特別のものでなくなり「わたしたちと肩を並べる程度の存在となった」から、としか語らず、説得的な議論を展開しているわけではない（邦訳第三巻、一二五、一二五九頁）。しかし、ここはそれをあげつらう場ではないだろう。プロの「戦没

者追悼碑」も同様で、原因の説明を欠くものの、一九四〇年代以降の追悼モニュメントは、「民衆の関心の的から、はるかズレた存在になった」状況を指摘している（原書一九九七年新版、第一巻、二二〇頁）。

私自身の研究から一例を挙げておこう。パリ市内に、「エジプト農民の泉水」と通称されるモニュメントがある。ナポレオン時代のもので、一八〇六年五月二日付政令にもとづいて建造が始まり、一八〇九年に完成、アンヴァリッド館（廃兵院）とリュクスンブル宮のほぼ中間地点の、大通り沿いの壁に設置された。ナポレオン・ボナパルトを総司令官にして断行されたエジプト遠征（一七九八―一八〇一年）を顕彰するモニュメントである。

このモニュメントには、古代エジプトを表す記号と、ナポレオンを表す記号が組みあわされている。古代エジプト神殿風の門と、その上部に施されている浮彫である。浮彫は、実際の古代エジプト神殿で見かけられる有翼太陽円盤（ホルス神の象徴）に代えて、一八〇四年七月一〇日政令で皇帝ナポレオンおよび帝政の紋章と定められた鷲になっているのである。内務省の科学・芸術局長アモリ・デュヴァルが、一八二二年に出版したパリ泉水案内本のなかで、記号のこの組み合わせについて賛意を披瀝している——「この泉を見ればいつも、記念すべきあの遠征が想い出される。想い出をこのように公共モニュメントに刻みつけるのは、うまい考えである」（Amaury DUVAL, *Les fontaines de Paris, anciennes et nouvelles*, Paris, Firmin Didot, 1812, p.17）。「記念すべきあの遠征」は、フランス革命下の共和政期におこなわれた。ところがこの泉水には、皇帝ナポレオンとその帝政を象徴する鷲が施され

た。エジプト遠征を「ナポレオンの遠征」として記憶させようとする、そんな政府の意図が顕わなモニュメントである。

さらに言うなら、ナポレオン体制下に建造されたパリの泉水には、重要な仕掛けがあった。セーヌ河の水が引かれたそれらの泉水は、観賞用だけでなく、水を飲み、水を汲む場でもあったことだ。一九世紀初頭のパリでは、ごく一部で水道が敷設されていたが、ほとんどの住民は、水売り屋から買うか、自身でセーヌ河から汲みあげるかして生活用水を手にいれていた。ナポレオンは、住まいの近くで無料の水が好きなら手にはいる、そんな装置を創ったのである。そのような場所に人が集まらないわけがない。不特定多数を対象とするプロパガンダにとっては最高の場所が、こうしてできあがった。住民の生活を改善してくれる泉水は、プロパガンダの場でもあったのだ。

ようするに「エジプト農民の泉水」は、設置の意図を明確に検証できるわけで、モニュメント研究の恰好の対象だと言えるだろう。俗っぽく言えば、オイシイ素材である。だが、民衆がどのようにに受容したか、となると、解明はやはり難しい。管見のかぎりだが、それを示すような資料はない。それだけではない。現状を言えば、このモニュメントは長らく放置されている。普段は泉水盤に水が供給されておらず、空の酒瓶や紙くずが放り込まれている。ペンキでのイタズラ描きも目立つ。ようするに、こういった荒廃が大問題にならないほど、民衆はこのモニュメントに無関心なのだ。

「エジプト農民の泉水」が登場する劇映画が一つある。「ルーブルの怪人 *Le fantôme du Louvre*」(二〇〇一年、フランス映画、

ジャン＝ポール・サロメ監督)である。古代エジプト人の魂が現代のルーヴル博物館に出現するという娯楽映画で、パリ市内に古代エジプト風モニュメントが数多く存在していることを強調するために、「エジプト農民の泉水」がスクリーンに登場するのである。その泉水と、エジプト遠征やナポレオンとの連関性はまったく描かれていない。ようするに、このモニュメントは、専門家以外には来歴を知られずに、パリの空の下にただ存在しているだけである。

人があまり寄りつかなくなったモニュメントは他にもたくさんある。思いつくまま見たままにいくつか挙げよう。二〇〇六年夏、広島城を訪れる機会があった。時期のせいもあるのだろう、よく整備された被爆関連モニュメントには人影が濃かった。広島城内には、比治山高等女学校動員学徒の追悼碑や被爆樹などがあって、説明書きがあるせいなのだろう、立ち止まって沈思する旅行客風情の人が複数いた。被爆関連モニュメントに対する日本人の関心は今でもおそらく高いのだろう。その一方で、同じ城内にある日清戦争関連モニュメントの前にたえずむ人は見あたらなかった。明治天皇が戦争指揮を執っていたとされる大本営跡である。

一九四五年まで、大本営の建物は文部省によって史蹟として保存されていた。小学校などの課外教育(見学や清掃奉仕)の場にご利用され、日清戦争の戦勝ならびに明治天皇の労苦を顕彰する役目が負わされていた。建物は原子爆弾で破壊されたが、礎石など土台部分は残り、大本営跡であることを示す案内板と石碑が設置されている。だが、ただそれだけである。

広島城は原子爆弾ですべての建物が破壊されたが、一九五八年

には天守閣が外観復元され、表御門や平櫓なども一九九四年までに木造復元された。だが、大本営建物を復元し、日清戦争関連の記念館にしようという声はどこからも上がっていない。かつての軍都広島に住民も旅行者も、被害の記憶を想起させるモニュメントには関心を持続させつつも、加害の記憶を想起させかねないものには無関心だという印象を、私は持った。

二〇〇七年二月、沖縄南部の戦跡を訪れた。駆け足だが、研究上著名な追悼モニュメントは一通り見た。驚かされたのは、「ひめゆりの塔」と、その他の追悼モニュメントとのあいだにある、訪問者数の格差である。「ひめゆりの塔」以外は閑散としていた。また、同じ戦没学徒の追悼モニュメントのあいだにも、関心の格差があるようだった。誤解のないように言い添えるが、ここでいう「関心」とは、遺族や同窓生、地域住民のそれではなく、一般旅行者の心性に限ったものである。「ひめゆりの塔」は無論のこと、「白梅の塔」や「でいごの塔」といった動員女子学生の追悼モニュメントには、修学旅行生などが手向けた品が目立っていたが、「沖縄師範健児の塔」に代表される動員男子学生の追悼モニュメントには、関係者以外が手向けたものはほとんど見られなかった。

二〇〇六年七月には、瀋陽の「九・一八歴史博物館」を訪れた。柳条湖事件六十周年を記念して建てられた博物館で、爆発事件があったとされる線路脇近くにある。中国政府が推進している「愛国主義教育重点基地」の一つであり、東洋史学のモニュメント研究では周知の博物館である。小学生たちが教師の引率で訪れたり、九月一八日当日などの何か反日イベントの際には多くの人が博物

館前の広場に今でも結集するらしい。私が訪れたのは、学校行事も反日イベントもない、そう言う意味では「通常」の開館日だった。人影の少なさに、正直私は驚いた。この博物館に関する論文を数編読んだばかりで、さぞかし中国人民衆の関心が高いのだろうと思いきや、こんでいたのである。今になって思えば、二〇〇六年七月段階で私が読んでいた論文には、一般民衆の意識にまで切り込んでいくような姿勢はなかった。

広島も沖縄も、もちろん瀋陽も、わずかな時間での印象にすぎない。そもそも、訪問者が多いか少ないかというのは、民衆意識を測る物差しの一つにすぎない。そういうことは重々承知の上である。ここで言いたいのは、モニュメントの設置目的を民衆はストリートには受容しないし、受容の本身も、無関心ということも含めて変化するということである。さらに言えば、モニュメントの設置目的は説明し易いが、民衆意識は一定せず、その説明には困難を伴うのであり、そういうことを常に意識して論文を書くなり読むなりする必要がある、と言いたいのである。設置目的を丁寧に説明する、秀才たちのスマートな一〇〇の論文より、たいていは上手く行かないのだが、民衆意識に切り込もうとする愚直な論文一編の方が、私には価値があるように思えてならない。

（京都大学大学院文学研究科教授）